

「地域の歴史と環境」から考える

私は、3セメスターに受講した、「地域の歴史と環境」を、マイベスト授業として紹介します。この授業は、「環境史の視点から日本史の概説を行う（シラバスより）」ものであり、総合科学部で瀬戸内地域の環境史を研究されている佐竹昭先生が担当される領域科目です。授業の構成は、佐竹先生が研究の過程で集められた資料や、研究成果を教材として配列し、主に中国地方、特に瀬戸内地域において、人々が動物や林野などの自然とどのようにかかわって生きてきたのかを板書やプロジェクト、配布資料を用いながら概説し、受講者は必要に応じてメモを取るという講義中心のものでした。講義の総まとめとしての期末試験は記述式で、当時の人々の暮らしについて説明したり、これからの私たちの暮らしの在り方について考えを述べたりするものだったと記憶しています。

この講義の中で、佐竹先生は、「山が緑であることが、必ずしもエコであり、環境にやさしいわけではない」ということを強調されました。「山に緑が多い」ということは、一見すると自然が豊かであるように思いますが、瀬戸内のような里山では、必ずしもそうではないのです。その例として、同じ場所を撮影した2枚の写真が取り上げられました。昭和初期と現在を対比した写真で、その差は明白でした。昭和時代の山は地表面の多くの部分が露出している一方、現在のほうはずっと森が多く、自然が豊かになっているように見えます。しかし、この緑に生い茂った山の裏側には、遠く海外から運ばれてくる石油の存在があるのです。山が緑になったのは、人々が自然を大切にするようになったからではなく、薪などの燃料源として山を手入れ・管理しなくなったことが原因なのです。このことについて、中には「石油を輸入していることは問題だが、山に緑が増える、つまり木が生い茂ること自体はいいことだ」と考える人も多いと思いますが、実はそうではないことについてもこの授業では扱われます。もともとこの地域は里山、つまり人が手入れ・管理をすることで保たれてきた自然環境であり、手入れをしなくなることで、例えば、落ち葉利用をしなくなることで土壌が富栄養化して樹木が立ち枯れするなどの様々な問題が生じるのです。この他にも講義の中では、地域の人々が歴史的に何を食べ、どのような暮らしをしていたのかを、風土記などの古文書と、生物の生息分布などのデータと照らし合わせながら紹介されます。

この講義で使われるテキスト（配布プリント）はユニークで、この講義を受けなければこの横断的な領域を理解することは難しいだろうし、いつもと違った角度で物事をとらえることができるので、知っているはずのことから新しい発見ができます。この講義を通して、私は、これからの私たちの生き方を考える一助となる視点を得られたように思います。普段私たちがあまり気にしていないこと、見過ごしがちなところにこそ、問題を解決するヒントが隠されており、この講義を受講することは、それを見つけるための練習になると思います。

この授業は、普段と違う視点・切り口で物事を見、考えるという意味において、歴史や環境を考える場合だけでなく、あらゆる場面・あらゆる人に役に立つと考えます。そして、この視点や考え方は結果的に私たちのこれから進むべき方向・生き方へとつながるのではないかと考えます。なぜなら、私たち人は、昨日より今日、今日より明日がよいものになることを望んでおり、そのために工夫や努力をする存在だと考えるからです。新たな切り口から物事を考えることにより、新しい発想が生まれて、それが私たちの未来への筋道になるのかもしれない。

この授業は、教養教育科目（領域科目）であり、誰もが受講することができます。多くの人に、

この科目の受講を勧めたいと思います。きっと、既存の知識から新しい発見をしたり、発想転換のきっかけが得られたりすることでしょう。この講義を通して、これまでの人々の生き方について知り、また、これからの私たちの生き方について考えるきっかけを得てもらいたいと考えます。

地域の歴史と環境シラバス（最終確認日：2011. 8. 23）

https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/syllabus/2011_AA_62310001.html